

希望の光

西部中・3 神谷 結衣

少しずつ春の訪れを感じ始めた二月、私は大きな怪我をしてしまった。それは、自分の剣道に確かな手応えを感じ始めた矢先の出来事だった。引き面を打ち、勢い良く左足で床を蹴ったその瞬間だった。

めーん。」

誰かにぶつかったような感覚がした瞬間、私はその場に崩れ落ちた。振り向いても誰もいない。足に力が入らない。立ち上がることもできなかった。

顧問の先生からの連絡を受けた母が、すぐに迎えに来た。そこには、私を不安にさせまいと気丈に振る舞う母がいた。

アキレス腱がおかしい。力が入らない。」

と言う私に、母は、

大丈夫だよ。大丈夫。」

と私の不安を吹き消すかのように言いながら、すぐに病院へ向かった。

診察室に入ると空気が一変し、慌てだす先生と看護師さんがいた。私は大きな不安に押しつぶされそうになった。先生から、

アキレス腱が切れちゃったね。治るまでに一年はかかるよ。」

と言われ、頭の中が真っ白になった。入院して手術を受けるか、保存療法といってギプスで固定するか、その選択を迫られたのだ。

剣道を頑張ってきた娘の姿を見てきたので、これからのことを考えると、何が最善の選択か判断が難しいです。」

と母が先生に言うのと、

やっぱり治さないと再断裂の危険があるから、長い目で見た治療が必要です。夏の大会は無理だから、中学校での剣道は諦めて、高校へ行ってからの剣道を考えた方が良い。長い人生を考えるように。」

と言われた。剣道ができないと思うと、悔しくて涙が止まらなかった。真っ暗な終わりの見えないトンネルの中に迷い込んだ私を母は強く抱きしめた。仕事が忙しくても、必ず大会には応援に駆けつけ、練成会の送迎等、私の剣道への想いを優先してくれてきた。身近で私の剣道を応援してくれていたからこそ、痛いほどにその苦しさ、辛さ、悔しさを感じていたと思う。それと同時に、母は、私がもう一度剣道に挑戦できるようにと、これからどうしていいかと動いていた。私の剣道への想いを知る家族や伯父母、従姉弟が、学校、部活、通院をみんなでローテーションを組んで送迎し、支えてくれた。そんな家族への感謝の想いの一方、怪我への絶望感や剣道への想いから、前向きな気持ちを維持できない時もあった。

剣道ができない。このブランクを乗り越える自信がない。」

と、弱気な気持ちを口にしてしまった時には、

大丈夫、結衣だからこそできる剣道があるはず。この経験を乗り越え、どう進むかが結衣の成長につながるよ。」

と、いつも私の心に寄り添い、逃げてはいけないうちに厳しく背中を押し続けてくれた母がいた。逃げ出さなかったからこそ、自分ができることは何か。自分の剣道とは何かと考えることができたのだと思う。

一年前、強く頼もしい先輩が引退し、私の部長としての剣道が始まった。西中剣道の気魄と伝統を守りたいという想いと同時に、先輩から引き継いだ剣道を守り抜けるのか、大きな不安の中にいた。そこには、勝つことが当たり前であった西中剣道が、一本を取ることで、勝つことの難しさを痛感する厳しい道のりが待っていた。同級生が男女一人ずつの私たちにとって、後輩と一からチームを作ると

ころから始めなければならぬ。チームが一つになるために大切なことは、互いを理解し、認め合い、信じることである。なぜなら、チームが一つになった時、個々の力以上の大きな力を生み出すことをこれまで経験してきたからだ。剣道は、打たれて修行せよ」というように厳しいもので、練習でできることが試合で活かせるかは、その強い精神力によるところが大きい。技を修めながら、人間性十人格形成を図ることが剣道の上達と進歩につながるのだ。練習でできたとしても、試合で勝ったとしても、決して自分の剣道にうぬぼれてはならない。自己に厳しく、相手に謙虚であってこそ、真の剣道の上達につながるのである。これが、私が剣道から学んだことだ。

夏の練習を乗り越え迎えた最初の新人戦でチームは惨敗し、反省するところばかりだった。この要因は、自分の剣道に余裕がなく、互いを思いやり、チームが一つになっていなかったことだ。それから、仲間の練習を観察し、動画を観て研究した。自分の剣道の修業があつてこそ、チームとしての剣道につながるからだ。この厳しい道のりの中で一番の転機は、県代表として出場した徳川杯の大会だ。この大会は、東海地区の強豪校の剣士たちが迫力とスピード感の中で剣を交え、その体感する力強さが私の剣道を刺激した。その大会での一本が、勝利が、「希望の光」が見えた瞬間だった。その光は、自ら試合の流れを作り出す速い攻めへと私の剣道を導き、勝利への可能性を実感させた。その矢先の怪我だった。

剣道部の目標は、県大会で入賞すること。この目標とは別に、私には、最後の大会で共に汗を流した後輩に伝えたい想いがあつた。それは、交剣知愛・剣心一如の心である。

初心者で始めたからこそ、剣道を通して学んだことを大切にしたいと考えている。部長の私がすべきことは、チームも心をつなぎ一つとすること。そのために、日々の稽古から仲間とのコミュニケーションを大切にした。剣道の話に限らず、人と人との心をつなぎ互いを思いやる関係を築くため、時には厳しいことも伝えた。みんなが

自分の剣道と向き合い、互いを認め合える関係がなければ、目標は夢と散ってしまうのだ。自己の剣道に向き合い、切磋琢磨する仲間を私は誇らしく思っている。

そして、痛く厳しいリハビリに耐え、四か月が過ぎようとした頃、稽古の再開と大会出場の許可が出た。うれしさの反面、大きな不安があつた。怪我が治っていない足で跳べないため、築き上げた自分の剣道を大会までの限られた時間の中で変えなければならなかった。その道のりが容易でないことは、分かつていた。その不安を払拭してくれたのは、

結衣ちゃんが戻ってくるまで、試合に勝って待ってるね。」と、私の復帰を待っていてくれた仲間と温かく見守ってくれた先生だ。稽古に付き合い、私の剣道を信じ、向き合ってくれた。そのおかげで、跳べないからこそできる剣道を見つけることができたのだ。

東三大会で結果を残すことが難しいとわかっていたが、チームの仲間は前向きで、やる気に満ちていた。そこに成長した西中剣道があつた。勇敢に攻め、自分たちの剣道を信じ戦う仲間とチームが一つになれたのだ。これこそが、私の目指した剣道だ。私たちの剣道に迷いはなく、仲間を信じ抜き、最高のチームワークで勝利を呼ぶことができた。これが、団体戦の醍醐味でもある。

私が最後の大会前に復帰できたのは、家族だけでなく、先生、友達、仲間、みんなの支のおかげだ。一人では真っ暗な終わりのないトンネルを抜け出すことはできなかったであろう。怪我をしたから見えた世界、苦しいことから逃げず、今自分にできること、何をすべきかを考え、前に進むことの大切さを学び、経験できたことは、私の人生の道しるべだ。支えてくれた人たちへの感謝を忘れず、苦しみを乗り越えた先に見えた「希望の光」を大切に、剣道の道を進んでいきたい。

そして、一つになった西中剣道は、八月に県大会へと挑む。自分

の剣道を信じ、仲間を信じ、目標を現実とすべく大きな一歩を歩む
であろう。これが、私から後輩たちへの「交剣知愛・剣心一如」の
バトンタッチだ。希望の光が、最高の剣道へと導くことであろう。